

令和3年度 後期卒業式 式辞

夙川の風景に微かな春の訪れが感じられる今日のこの佳き日、ご来賓のPTA代表の方々、保護者並びにご家族の方々のご出席を賜り、ここに令和3年度兵庫県立西宮香風高等学校後期卒業証書授与式を挙行できますことを心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました184名の卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。教職員一同、心よりお祝い申し上げます。今日の卒業の日を迎えるまでには、通り一遍の言葉では言い表すことのできない、たくさんの出来事があったことだと思います。それらの日々を乗り越えてきたみなさんの努力に対して、深い敬意を表したいと思います。

保護者並びにご家族の皆様、本日は誠におめでとうございます。立派に卒業の日を迎えられたお子様の姿に、感慨もひとしおのことと存じます。また、この場をお借りいたしまして、これまで本校にお寄せいただきましたご支援、ご協力に深く感謝を申し上げます。

さて、卒業生のみなさんが過ごした高校生活を語るうえで避けて通ることはできない、新型コロナウイルス感染症との戦いはもう2年を越えようとしています。みなさんの中には、高校生活の半分以上が、自粛と様々な制限の毎日であった人もいます。後世、私たちはこの何年間かをどのように振り返ることになるのでしょうか。容易に想像がつかぬのが「多くのものが失われた時代」として、わかったようにひとくりにされてしまうことです。もちろん、教育活動のあるものは中止に、またあるものは実施されても形が変わってしまいました。それは確かです。けれどもこれは、世界というものを捉えようとする見方のひとつではありません。むしろ本当に価値のあるものは、そうではないものの見方の中にあります。

先日、日本を代表する詩人で、今年91歳になられる谷川俊太郎さんのある言葉が心に残りました。谷川さんはあるインタビューの中で「今は、意味偏重の世の中になっています。誰でも、何にでも意味を見つけたがる。意味を探したがる。けれども、意味よりも大事なことは、『何かが存在する』ということ、『ある』ということなんです。存在するということ、言葉を介さずに感じるのがすごく大事で、生きていくうえで、意味づけしないでじっと見つめる、じっと我慢するということはあるんです」とおっしゃいました。

ここでいう「意味」とは、たとえば役に立つとか立たないとか、楽しいとか楽しくないとか、そういうことです。学校生活をそのようなモノサシで意味づけるのではなく、谷川さんのおっしゃるように「存在すること」それ自体の価値を認め、もっともっと肯定することが大切なのです。みなさん一人ひとりが今、この時間、この空間にいるということだって当たり前ではなく、それ自体が何物にも代えがたい価値なのです。

そのように世界を見るとき、私たちは、青春の輝きが、そして生命の輝きが、コロナウィルスの自粛程度でかすんでしまうほど、か弱いものでは断じてないことに気づくはずで、いつか将来、「あなたたちはコロナでいろんなものがなくなって、かわいそうな高校生活だったのね」と言われたら、にっこりと笑って、「いいえ。そんなことはありません。私たちはみんな輝いていました。だって確かにみんな一緒にいたんですから。もちろんこうしている今も、私は輝いています」と、胸を張って答えてください。

意味づけしないでじっと見つめる、そして「ただあること」の価値に気づくことは、究極の優しさであり、強さでもあると思います。コロナ禍をこの西宮香風で過ごしたみなさんだからこそ、その心を胸に秘め、どうかしなやかに、そして強かに生きてください。そのような生き方の向こう側には、必ずやあなたのことを認め、温かく見守り、寄り添ってくれる人との出会いがあります。そう、信じています。

みなさんの前途が明るく、幸多いことを心からお祈りして、式辞といたします。

令和4年2月26日

兵庫県立西宮香風高等学校
校長 谷口 暢謙